

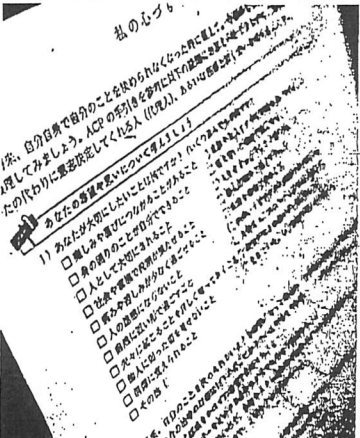
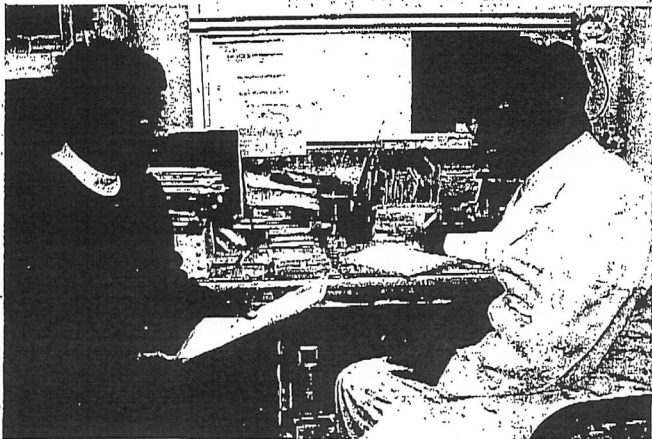
# ACCPのススメ

## アドバンス・ケア・プランニング

### 広島県地対協 東広島で試み

## 「もしも」に備え 医療を選択

もしものときに、どんな生活を送り、どんな医療を受けたいかを医師や家族と話し合っておく「アドバンス・ケア・プランニング（ACP）」。



④どんな医療を受けたいかを話し合う西本さんと楠部院長  
⑤ACPのチェックシート「私の心づもり」

## 「思いが形に」安心生む

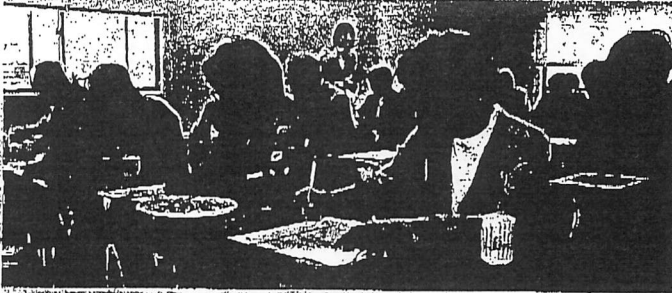
借りのながらも自宅で生活することや、痛みを苦しみながら自分らしさを保つ治療を望む回答。延命治療は「希望しない」と答えた。離れて暮らす一人娘にも「書き込んだ」私の心づもりを見て、サインしてもらった。楠部院長は手

「まだ元気がですが、そろそろ『終活』を始めないとねえ」と思っていたとき、ACPの存在を知った。1人暮らしをして25年になる西本宏江さん(83)東広島市は、かかりつけのなご内科医院の待合室に貼ってあったポスターを見て、楠部隆院長(64)に「ぜひ、ACPをお願いします」と申し出た。西本さんが楠部院長に渡されたのは「私の心づもり」と題したA4判、2枚のチェ

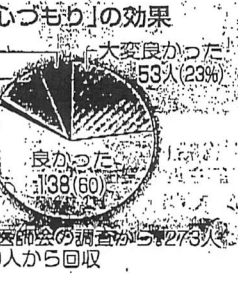
## 体験して

ックリスト。病気の事故などで自分で自分のことを決められなくなったときに備えて、希望や思いを導く12の設問が並んでいる。「病気が悪化した場合の治療の目標は」「どこで療養したいか」「延命治療を希望するか」…。それぞれの設問には複数の回答が示されており、そうだとするものを選んでチェックする方式になっている。西本さんが選択したのは、家族やヘルパーの手を

渡し、西本さんのカルテのファイルに保管してもらっている。「あらためて自分の気持ちを確認する機会になったし、いざというときの準備ができて安心しました」と西本さんは語る。病と闘いながら、ACPに臨んだ人もいる。竹原市の女性(70)は、2年前に肺がんを発症。治療の副作用で急性腎不全となり、1年前からは週3回の人工透析も続けている。がんと透析に向き合う日々の中で、心配しているのは自分の思いが医師にしっかり伝わっているかどうか。病院の医師は入院を勧めますが、私は最期は家で過ごしたい。言葉でも伝えていますが、文書で明示



東広島地区のモデル事業を担当したのは、東広島地区医師会地域連携室「あざれあ」。それぞれの地域の住民たちが集う地域サロンに、あざれあスタッフが出掛けていきACPについて説明した。40・90体の男女273人が「私の心づもり」に記入し、感想を聞くアンケートに答えた。「私の心づもりをまとめて大変良かった」「良かった」と答えたのは8割の191人。自由記載欄には「ACPを家族と今後の人生について語り合っ



## アンケートから 住民前向き 医師への足

住民はACPに前向きだった一方、患者に呼び掛けてACPを実践した医師は2人に留まった。東広島地区医師会の副会長でもある楠部院長は「医師は多忙で治療に集中して手いっぱい。個々の患者さんで、終末期の話をどのタイミングで切り出すか難しい面もある」と分析する。あざれあがまとめたモデル事業の報告書では「介護保険の要介護認定の申請をするときにACPをセットで実施する」ことを提案。また、住民のACPへの関心の高さに注目し、杉本さんは「民生委員の皆さんの力を借りるなどして地域で広げていく方法も有効かもしれない」と話す。

モデル事業の内容や調査結果は、4月に盛岡市にある在宅医療学会でも報告する。

「私の心づもり」に記入する地域サロンの参加者たち (東広島市)